

『今月の天候と農作業』

通巻第5710号
4月号
令和8年3月26日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みです。

低気圧や前線の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は少ないでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	10	80
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	50	30	20

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。平均気温は、高い確率80%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、少ない確率50%です。

<1 週目の予報> 3月28日(土)～ 4月3日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<2 週目の予報> 4月4日(土)～ 4月10日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 4月11日(土)～ 4月27日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稻

1 田植え後の水管理

茎葉からの蒸散を抑えるため、活着までは深水で管理します。活着後は、水温を上昇させるために朝に入水し、浅水で管理します。ただし、晩霜の予報が出された場合は稲体を保温させるために深水で管理しましょう。

2 病虫害対策

田植え前までに、いもち病の対策として箱施薬を行います。補植用の余り苗は、いもち病の発生源となるため早めに処分します。スクミリングガイ（ジャンボタニシ）の発生を確認したら、浅水管理や薬剤での速やかな防除を行いましょう。

3 除草対策

必ず除草剤（初中期一発剤）のラベルの記載内容を確認し、ヒエの葉齢を見ながら散布遅れにならないようにします。

除草剤処理後7日間は掛け流しをせず止水します。また、ジャンボ剤を使用する場合には、薬剤がしっかり拡散するよう処理時に5cm以上の水深を確保します。田植えとの同時処理では、薬害対策として田面の均平や植付深度、田植え後の土の戻りを確認するとともに、田植え後速やかに入水します。

初中期一発剤の散布遅れや水管理不足等で雑草が残った場合には、速やかに中後期除草剤を処理しましょう。

◆麦類

赤かび病防除のため、小麦では穂揃期（開花期）に、二条大麦では穂揃期の7～10日後（葯殻抽出期）に1回目の、さらに、その7日後に2回目の薬剤防除を行いましょう。

（福川 泰陽）

施設野菜

日中の気温上昇や日射量の増加により蒸散量が増加するため、かん水量を増やします。葉に強い直射光が当たると、葉焼けや萎れが発生するため、日中はカーテン等を利用して日射量を調節します。また、湿度が低下すると曲がり果や尻細果等の発生が多くなるため、通路散水などで湿度を確保しましょう。

◆ピーマン

茎葉の繁茂による白果や収穫遅れによる赤果の発生、成り疲れ等によるうどんこ病の発生が多くなるため、光を遮っている茎葉の整枝・せん定や適期収穫を徹底します。また、土壌水分や肥料が不足すると草勢が著しく低下するため、こまめなかん水・追肥を行い、草勢を維持しましょう。

◆トマト類

気温の上昇に伴い裂果が多くなるため、着色度合いを調整しながら収穫するとともに、果実を結露させない温湿度管理、土壌水分変化の少ない灌水管理等に努めます。

◆いちご

日中の気温上昇や日射量の増加により、果実温度が上がることで、果実傷みによる事故が多くなります。収穫時の果実温度に注意するとともに、収穫後は冷蔵を行います。

また、次作の育苗を開始する時期です。健全な親株を確保するために、炭疽病の簡易検定を行い、感染の疑いのある苗は早期に除去・処分するなど、万全の対策を実施しましょう。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

◆全般

いも類や夏野菜の定植期、は種期です。マルチ栽培では萌芽不良や生育障害等を防止するため、適切な土壤水分（手で握って団子になる程度）の状態であてとマルチ張りを行いましょう。

◆さといも

早生種のマルチ栽培の萌芽期です。萌芽が始まったら、芽がマルチを押し上げている場所に穴を開けて芽出しをしましょう。

◆食用かんしょ

普通掘栽培の定植期です。育苗床のかん水量を徐々に減らすとともに、換気を行い、外気に馴化させます。4月上旬は、遅霜や気温の低下により定植後の活着が悪くなるため、天候を見ながら定植しましょう。

採苗は定植3～5日前の午後を目安に行います。苗は地際から5 cm以上離れた位置で採取し、採苗後は苗全体を農薬で消毒します。調整後の薬液は日光や汚れなどで分解するため、当日限りの使用としましょう。

◆スイートコーン

大型・小型トンネル栽培は、4月上～中旬の雄穂抽出期が追肥の目安になります。雄穂出穂前に追肥しましょう。雄穂抽出から10～14日後に雌穂（絹糸）が抽出し果実が肥大します。トンネル内の高温による葉焼け等を防止するため、ビニールの開閉管理に気をつけます。換気不足は徒長しやすく、耐寒性を弱め、強い寒さがきた場合霜害を受けやすいため、晴天時に換気を十分行い、外気に慣らします。株元から発生する分けつは、除去せずにそのまま残しても生育に大きな影響はありません。

（倉永 泰代）

果樹

1 常緑果樹

◆かんきつ全般

今年は前年より開花が早くなると予想されています。近年は発芽から開花までの期間が短く、花器の充実不足に伴う生理落果が見られます。花器の充実のために、発芽期から開花期にかけて窒素主体の葉面散布を数回行います。また、今年は裏年傾向の園地が多いことが予想されます。着花が少ない園地は、着果確保のためにも着花状況を確認しながら、かぶり枝や新梢の除去を行きましょう。

◆完熟きんかん

剪定が終わっていない園では、必ず4月上旬までに剪定を実施します。気候変動の影響により、近年は樹勢低下や生理障害が散見されています。剪定終了後は、たっぷりのかん水、春肥の施用、土壌改良によって樹勢回復を徹底します。

発芽揃いを良くするためにハウス内の蒸し込みを行うとともに、新梢の充実を図るために窒素主体の葉面散布を数回行います。

◆マンゴー

早期作型は収穫時期です。収穫が近づくにつれて果皮が弱くなり、果皮の結露が原因と考えられる「あざ果」や「やに果」が増加してきます。対策として、ハウス内の急激な温度上昇を防ぎ、早朝の換気やヒートポンプによる除湿によって結露を防止します。また、次第に日射が強くなり、日焼け果が発生することがあります。カーテンや遮光ネットを利用し、日焼けを防止しましょう。

2 落葉果樹

◆かき

摘蕾は生理落果後の摘果に比べて、樹体養分の確保や翌年の花芽分化に有効です。開花始め頃から二分咲までの間に実施します。1結果枝当たり1花残すことを原則とし、長い結果枝には2、3花とします。

(黒木 宏憲)

花き

◆電照ギク

曇雨天が続くと、ハウス内の湿度が高まり、白さび病が発生しやすくなるため、定期的に防除を行います。

年末以降に出荷する作型の親株育成の時期です。作型や穂冷蔵の有無等の条件を考慮し、計画的に作業を進めます。

◆夏秋ギク

5、6月出荷作型の「フローラル優香」では、低温により貫生花が発生しやすくなるため、4月中は10℃、消灯後3週間程度は16℃の夜温を確保します。

また、「精の一世」の7月以前の出荷作型では、低温により幼若性を獲得する恐れがあるため、消灯前は13℃程度、消灯後は18℃程度の夜温を確保します。

◆スイートピー

受粉から子実の肥大期です。

つる下げにより草勢を弱めたり、採種率の低い品種は株を揺らすなどして着莢を促します。灰色かび病が蔓延しないよう、定期的に防除を行いましょう。

また、充実した大きな種子を得るために、定期的にかん水や施肥を行います。

◆ホオズキ

7月出荷作型では4月中～下旬に、8月出荷作型では4月下旬～5月上旬にマルハナバチを導入し着果促進を図ります。

日中のハウス内温度が15℃を下回ると、花粉の発芽不良やマルハナバチの活動停滞による着果不良になりやすいため、ハウスのサイドを閉めるなど、保温に努めます。

◆シキミ

春芽の萌芽時期です。

定期的な防除を実施し、黒しみ斑点病やサビダニ類の発生を抑えましょう。

◆ラナンキュラス

球根養成期です。

養成株は蕾をできるだけ早めに摘除し、徐々にかん水頻度を減らすことで、球根の肥大を促します。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

高病原性鳥インフルエンザは、令和8年3月13日現在、宮崎県を含む全国の養鶏場で21事例の発生が確認されています。

また、県内における野生イノシシの豚熱（CSF）感染事例は94例に達しており、畜種を問わずウイルスの侵入リスクが非常に高い状況にあります。

農場を守るため、改めて防鳥ネットや防護柵に隙間や破損がないか点検し、野生動物の侵入を徹底して防ぎましょう。また、日頃から健康観察を丁寧に行い、異常が見られた場合には、速やかに家畜保健衛生所へ連絡しましょう。

◆家畜

寒さは和らいできましたが、依然として昼夜の寒暖差が大きいため、畜舎では細やかな温度管理が求められます。特に体温調節機能が未熟な幼畜には、細心の注意を払いましょう。

気温が上がる日中は換気を行いますが、夜間は必要に応じてコンパネ等での囲いや防寒ジャケットの着用など、適切な対策を継続してください。

また、今年は降水量が少なく乾燥した日が続いています。埃が気になる時は、細霧器等を使用して加湿を行い、畜舎内が乾燥しすぎないように留意しましょう。

◆飼料作物

イタリアンライグラスやエンバクの収穫・調製作業が本格化します。収穫適期は圃場全体の5割が出穂した頃です。適期を逃さず、栄養価の高い良質粗飼料の確保に努めましょう。

サイレージに調製する場合は、数日間の予乾で水分を50～60%に調整し、土砂の混入を防ぎます。硝酸態窒素を低減するため、雨上がりを避け、刈取り高はやや高めにししましょう。梱包時は高密度に仕上げて速やかに密封し、乳酸菌が働きやすい環境を整えるのがポイントです。給与前には色や香りで品質を確認しましょう。

また、早播きトウモロコシ等の春夏作の作付けも始まります。播種前には土壌分析を行い、適切な肥培管理に努めましょう。

(長瀬 朋子)

特用作物

◆茶

1 防霜対策

一番茶の生育に合わせ、防霜ファンの状況（設定温度、首振り角度、回転方向）やスプリンクラーヘッドの詰まり等を確認し、作動不良により霜害が発生しないよう注意しましょう。

2 芽出し肥の施肥と防除

芽出し肥は、硫安等の速効性肥料を摘採の25日前までに施用します。うね間だけでなく雨落ち部まで広範囲に施用します。

気温の上昇に伴いカンザワハダニやツマグロアオカスミカメ、コミカンアブラムシ等の発生が多くなるため、発生状況を定期的に確認し、地域の防除暦に準じて丁寧に薬剤を散布しましょう。

3 一番茶の摘採及び製造

高品質な荒茶を製造するため、茶工場の処理能力や一番茶の生育状況・降雨等を考慮し、「摘み遅れ」とならないよう摘採計画を立て適期摘採に努めます。

また、事前に摘採機の刃研ぎや製茶機械の点検・清掃・試運転等を行いましょう。

摘採時には摘採袋への生葉の詰め過ぎを避け、摘採後は速やかに（30分以内）茶工場へ持ち込み、欠陥の無い荒茶製造に努めます。荒茶への異物混入防止対策も徹底しましょう。

（新 正仙）

◆しいたけ

1 選別

乾しいたけは、用途に応じて取引されるため、商品価値を高めて販売するためにも、規格表を参考に選別します。特に、次の点に注意します。

- ① 異物（ほだ木の樹皮、虫、金属類等）は絶対入れない。
- ② 乾燥不良、虫害、カビ、黒子など規格外品は絶対に混ぜない。
- ③ 3cm以下を他のサイズに混ぜない。
- ④ バレと縁に巻きがあるものとは別々にする。
- ⑤ できるだけ種菌、採取時期、日和子、雨子別に行う。
- ⑥ 丸形と変形とは区別する。

⑦ 湿度の低い晴天時（雨天時は避ける）を選んで行う。

2 箱詰め

箱詰めは、最初からたくさん入れずに、まず2分入れて揺すり込み、さらに4分、6分、8分、最後に11分ほど入れてその都度丹念に揺すり込みます。箱詰めがゆるいと、輸送途中で欠け葉が生じ、商品価値の低下を招く恐れがあるため注意が必要です。また、箱詰めに古箱は使用しないようにしましょう。

（奥野 慧）

関連情報

◆農作業安全

3月から「春の農作業安全確認運動期間」が始まります。

農業機械が通る道路などを事前にチェックし、危険箇所の確認を行うとともに、危険箇所では迂回や減速を行うなどして、安全な農作業を心がけましょう。

◆茶セーフティネットの開始

茶の加工時期となり、国の令和8年度茶セーフティネット構築事業が4月から開始されます。

事業に加入されている方は、4月中に積立金の納付が必要です。

県では、燃料価格が高止まりしているため、昨年度に引き続き、積立金の一部を補助します。加入者の積立金は、県補助額を差し引いた額となります。

なお、補てん対象となる燃料は、令和8年4月から11月までに購入した茶加工用の燃料になります。毎月の燃料購入実績を忘れずに提出しましょう。

◆農薬適正使用

農薬の使用に当たっては、散布前に必ず農薬ラベルに表示された適用作物、適用病害虫、濃度、量、時期、回数等の使用方法をしっかりと確認しましょう。

散布時には、河川等の周辺環境、隣接するほ場の作物、周辺住民、家畜等に害を与えないよう周囲への飛散・流出に注意しましょう。

農薬散布後に、散布履歴を記帳するとともに、使用した防除器具を十分に洗浄しましょう。

（農業普及技術課）

内容の詳細について

4月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、農業普及技術課が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ
☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病	—	置き苗は、発生源や伝染源となるため早めに処分しましょう。
	イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ	— —	箱施薬をしていないほ場で、イネミズゾウムシの発生が目立ち始めたら粒剤の水面施用を行きましょう。スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、捕殺あるいは粒剤を水面施用しましょう。
野菜・工芸作物	アブラムシ類	やや多	各種植物ウイルスを媒介するため、早期発見・防除に努めましょう。
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病	やや多 やや多 並 並	気温の上昇に伴い各種病害の発生に好適な条件となるため、気象の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底しましょう。いずれの病害も多発してからでは防除効果が上がりにくいいため、予防・初期防除に重点をおきましょう。
	黄化えそ病(MYSV) ミナキイロアザミウマ	やや多 やや少	ミナキイロアザミウマは、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいいため、複数の薬剤により7日間隔で少なくとも3回の連続防除を行きましょう。
	タバココナジラミ	やや多	タバココナジラミの発生が多くなっています。効果のある殺虫剤が少ないため発見したら直ちに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行きましょう。
	斑点病 うどんこ病 黒枯病	並 やや多 並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が上がりにくいいため、予防・初期防除に重点をおきましょう。被害茎葉等は伝染源となるため、整枝後の残渣等はすみやかに持ち出し処分しましょう。
冬春ピーマン	ミナキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバココナジラミ	やや多 やや多 やや多	アザミウマ類、コナジラミ類は、気温の上昇とともに増殖しやすいため、発生初期に防除を行きましょう。
	灰色かび病 葉かび病 すすかび病 うどんこ病 タバココナジラミ	並 少 多 やや多 多	すすかび病、うどんこ病の発生が多くなっています。発病葉をできるだけ摘葉したのち、丁寧に薬剤散布を行きましょう。発病後の防除は効果が低いため、予防散布に重点をおきましょう。 タバココナジラミの発生が多くなっています。ウイルスの媒介虫であることから、発見したら早めに防除し、密度低下に努めましょう。
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病	やや多 並	うどんこ病が多くなっています。ハウス内を乾燥させすぎないように管理しましょう。発病葉・果実は早めに摘除してハウス外に持ち出しましょう。
	ハダニ類 ハダニ類 ヒラズハナアザミウマ	並 並 少	ハダニ類は、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群がいるため、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みましょう。 ヒラズハナアザミウマは寄生花率10%以上で被害果が発生する恐れがあるため、低密度時に防除を徹底しましょう。
サツマイモ	基腐病	—	育苗床に発生を確認した場合は、種イモごと速やかに処分しましょう。採苗当日に苗消毒を行いますが、消毒液は必ず当日に調整したものを使用しましょう。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病	並 並	そうか病、かいよう病ともに、罹病した枝葉は春葉への伝染源となるため徹底的に除去しましょう。春葉での感染が多いと果実への感染を抑えることは難しいため、春葉の発芽前から展葉期の防除が重要になります。
	ミカンハダニ	やや多	ミカンハダニの冬期防除が実施できなかったほ場では、発生状況に応じて薬剤散布を行きましょう。
茶	カンザワハダニ	やや多	一番茶萌芽期以降発生が多い場合には、農薬使用基準の摘採前日数等に注意して防除しましょう。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) 病害虫防除・肥料検査センターのHPアドレスは、QRコードより閲覧してください。

